

ることとなりたり。猶入學志願者の心得、願書の提出方、選抜試験の課目、受験者の携帶品等は、悉く載せて前記の日の廣告にあるを以て、必要の人々は右に就きて承知せらるべし。

○新設道路と門衛所の落成 兼て記したる本校構内を中斷して、屏風坂通りより谷中へ通ずる幅六間長百廿六間の新設道路は、昨年未に至りて全く落成し、兩門衛所も同時に竣成したるを以て、本年に入りてよりは從來の裏門は閉鎖せられ、新設道路の中央位置より左右に兩門を入ることとなり、道路は未だ車馬の通行を許さざるも、徒歩のものはその通行を默許しつゝあり。本校に取りては不便を來たしたるも、公衆は餘程便利を得るなるべし。因にいふ公然此道路の車馬の通行を許すは、來三月末頃なるべしと聞く。

○本校の改築落成と紀念展覽會 本校の改築は漸次に竣成を告げ、最早大部分は落成したる譯にて、此後は供待所倉庫等の雜建物を造營するのみなれば、左程に手數も掛らず、且經費も本年度限りなりとの事にて來る三月中には是非共全部竣成すべき筈にて、此竣成を告ぐると共に、恰も本年の卒業式あるべく、同式は毎年三月二十九日なれば、之に引續きて開校滿二十五年の紀念式を擧げ、生徒成績品並に所藏品の紀念展覽會を催さるべしといふ。日取は未だ確定せざれども三月三十日か三十一日頃より、凡そ五日間位開催せらるべき見込なりと。

## 関連事項

### ① 小場恒吉の起用

大正二年二月五日、小場恒吉（明治四十一年一月八日以降本校雇、図

案科助手）が助教授に任命された。小場は明治十二年秋田県生れ。

同三十六年七月本校図案科を卒業し、茨城県立龍ヶ崎中学校、秋田県立秋田工業学校の教諭を勤めたあと、同四十一年一月に本校雇（図案科助手）となった。彼は既述（35頁）のように大正元年から同三年にかけて高勾麗古墳の壁画模写に従事していたが、その傍ら、制作にも意欲を燃やし、大正二年一月二十五日、彼の「藤原式纒彩色手箱」は第一回賞美章受賞の榮譽に輝いた。この手箱は前年十二月に吾樂が開催した万蓋よろずまたあるもの展覽會（香取秀真・津田信夫・石井吉次郎・堆朱楊成・藤井達吉・豊川楊溪・渡辺香涯・磯矢完山・小場恒吉ら出品）の出品作で、これが一年間に製作された美術および工芸品の中の最優秀作に与えられる『美術新報』主催の賞美章を授与されたのである。小場は日本古来の美術工芸および建築裝飾に関する研究家で、宇治鳳凰堂の彩色模様に着想を得、宝相花や唐草模様、纒綢彩色法や金泥による毛描き等々を応用してこの手箱を作り、これによって一躍名を知られるようになった（賞美章授与については、『美術新報』第十二卷第四号参照。また、同誌第十二卷第六号には小場が腐骨という筆名で製作談を寄せている）。



小場恒吉

家で、宇治鳳凰堂の彩色模様に着想を得、宝相花や唐草模様、纒綢彩色法や金泥による毛描き等々を応用してこの手箱を作り、これによって一躍名

### ② 川端玉章死去

大正二年二月十四日、もと本校教授川端玉章が死去した。『東京

美術学校校友会月報』第十一卷第六号は表紙に肖像写真を掲げ、十ページをその追悼記事と遺作(本校所蔵)紹介に充てている。玉章は明治二十一年から本校に勤務し、本校および家塾で多数の画家を育成するとともに帝室技芸員(二十九年)、古社寺保存会委員(三十年)、各種博覧会および文展その他の委員をつとめ、同四十三年に至って本校教授の中では初めての勅任官となり、同四十五年に病氣のため本校を辞任した。

葬儀は二月十七日に本所押上の菩提所真盛寺で行われ、一千余名の会葬があり、門人総代端館紫川、川端画学校職員総代福井江亭、同校生徒総代、東京美術学校校長正木直彦、帝室技芸員総代高村光雲および日本美術協会、文墨協会その他団体代表者の弔辞朗読があった。墓は関東大震災後、芝伊皿子の正源寺に移され、側らに記念碑が建てられた。

本学構内の川端玉章銅像(胸像)は福井江亭その他門人が玉章の古稀の祝いに川端家に贈ったもので、原型は武石弘三郎、鑄造は大峽武司。大正三年に東京美術学校に寄贈された。なお、昭和七年四月に至り、結城素明その他門人により別に川端玉章翁碑(香取秀真作)も構内に建てられた。また、大正二年に川端家から日本画科生徒のための奨学金千五百円が本校に寄贈された。

### ③ 石川光明死去

大正二年七月三十日、彫刻科教授、帝室技芸員石川光明が死去した。牙彫界の第一人者であり、本校の草創期から高村光雲と並んで木彫、牙彫の指導にあたり、日本美術協会、彫工会、文展その他の



石川 光明

審査員を歴任したが、明治四十四年自宅全焼の悲運に見舞われ、また、胃癌に罹り、本年五月末より引籠って療養していた。『東京美術学校校友会月報』第十二巻第五号に追悼文と光雲の追憶談、肖像および最近作の写真が掲載されている。葬儀は八月二日に谷中斎場で営まれ、浅草の龍福院に埋葬された。

大正四年春、本校で石川光明の遺作展が開かれ、構内に銅像が建てられた。これについては『東京美術学校校友会月報』第十六巻第一号に次のように記されている。

○石川光明翁遺作展覧會 同會は豫定の通り四月一日より三日間、東京美術學校文庫に於て開催せられたり、出品二百餘點は淺草松葉町時代、下谷竹町時代、眞島町時代、天王寺時代に分ち階上階下處狹きまでに陳列せられたるが、翁の牙彫は多く海外に輸出せられたるため出品は牙彫よりも寧ろ木彫多數を占めたり、三日間の來觀者二千三百名に上り彫刻の展覧會としては稀に見るの盛會なりき。また朝倉文夫氏の原型加藤直泰氏の鑄造にかゝる同翁銅像は東京美術學校玄關前右側に建設せられ、四月一日午前十時遺族門下生知人來賓列席して除幕式を行ひたり、先づ三浦光風氏門下生總代として銅像建設の次第並に學校へ寄贈の辭を述べ、正木校長代理高村教授の受領の挨拶、令嗣石川光春氏の謝辭あり、